

II. 「宇宙文化学」連携講義成果—学生レポート実例集—

講評

国立大学法人神戸大学 岡田浩樹

国際文化学特殊講義「宇宙文化学」は、JAXA 大学・研究機関連携室と神戸大学国際文化学研究科の協力協定に基づく、連携事業の柱の一つである。

これまで文科系、特に人文科学領域に偏在していたリベラル・アーツ（教養）の見直しが大学教育において緊急の課題となっている。環境問題、エネルギー問題、遺伝子操作をめぐる問題などに象徴されるように、科学的研究や技術の急速な進展は、グローバル・レベル、国家レベルだけでなく、個々の生活世界に大きな影響を与えている。これに対し、個人、さらには社会の一員としてどのように向かい合うかの問題は、専門家である／なしに関わらず 21 世紀の市民社会のあり方の根幹に関わる問題である。そして「宇宙開発・探査」は、そうした新しい課題領域のひとつであり、来たる社会や文化がいかにあるべきかという人文社会科学の基本的な教育・研究領域に関わっているという認識のもとに、ひとつの試みとして「宇宙文化学」を神戸大学国際文化学部の専門科目として開講した。

とはいえ、人文社会科学系の学生に、宇宙開発・探査の問題を講義し、問題を理解した上で、彼ら／彼女たちがそれについて主体的に思考するレベルまで導くのは、これまで行われておらず、その意味で手探りの実験的試みであった。人文・社会科学を専攻する学生が、宇宙関連の科学に関する基礎的な知識を得るためのみに開設される所謂一般教養の理系科目とは目的が異なっている。学生が宇宙開発・探査について、何を知識として得たいと欲し、また何を理解し、何を考えたか、が問題となる。

そこで講義の最後には、宇宙開発・探査について各自が自由にテーマを設定し、レポートを作成させた。ただし、学術レポートとしての水準はもとより望むべくもない。卒業論文に取りかかる前で本格的な論文に取り組んだことがない学部生であり、またもともと基本的な宇宙開発・探査に関する基本的な知識がないだけでなく、高校までの文系／理系という枠組の中で基本的な科学の知識が不足しがちな学生たちのレポートであり、それは致し方ないといえよう。

一方で、学生たちのレポートは、大学生の多数を占める文系の学生が宇宙開発・探査というテーマにとりくんだ際に、何に関心をもち、どのような思考の方向に進んでいくかの貴重なケーススタディとなる。つまり、このレポートは、ある世代、さらには日本社会における多数派を占める文系の市民の状況を知るひとつの手がかりとなると思われる。

神戸大学国際文化学学部は、文系の学問分野を中核としつつも、文学、歴史、思想とい

った古典的人文科学分野から、文化人類学、社会学、コミュニケーションといった人文社会科学分野、さらには政治学、国際関係論、情報論を含む、コミュニケーション研究といった社会科学系分野も含み、多様な分野をもつ学際的な人文科学系の学際的な学部である。このため、学生たちの関心が特定の分野を出発点としているのではない。その事は、学生たちのテーマに如実に表れている。以下、個別のレポートの評価ではなく、今回提出された学生のレポートの全体的傾向から、文系の大学生たちが、宇宙開発・探査の何に関心があり、そこから主体的に知識を獲得し、理解を深めようとしているか、その傾向を探るひとつの事例として簡単な検討を行ってみよう。

学生のレポートタイトル一覧（五十音順）

- 「宇宙」から視えてくるもの
- 宇宙からヒントを得た異文化理解
- 宇宙食×イスラム教
- 「宇宙体験」と「精神分析」
- 宇宙とまちづくり
- 宇宙と短歌—宇宙飛行士のする” 日本的な” ことと日本人の反応
- 宇宙の平和的利用～GPSは世界平和をもたらすことはできるか～
- エスペラント語の宇宙公用語としての可能性
～英語が共通語となっている現状の問題から考える～
- 極限状態における人間の心理と行動 ～宇宙飛行士と南極越冬隊の比較から～
- 現代の家族構造の宇宙での存在の可能性—E. トッドの家族構造、移民論より
- コーランと宇宙科学技術—ムスリムの礼拝と宇宙—
- 今後の宇宙に必要なのは「柔軟さ」である
—ムスリムの例から、今後の宇宙飛行士教育まで
- 女性宇宙飛行士について
- 選抜試験から見た宇宙飛行士
- 中国の宇宙開発と国際関係
- 特撮作品から見る国際的宇宙組織像
- なぜ人工衛星に愛称をつけるのか？
- 日本において克服されてきたタブー—宇宙からの技術移転に向けて—
- 日本の宇宙開発利用における「平和」と「防衛」
- 日本の新宗教から見た自然科学の発展と宇宙進出
- マーズワン・クルー志願者の意識調査とその考察
- 水再生技術の南海トラフ地震で起こりうる水不足問題への利用
—教育という視点から—”

- 無重力下の身体変化（筋力）
- 無重力空間における言語の変化
- GPS を利用したカーナビゲーションシステムの導入と地図の発展
～主に昭文社の事業計画を参考に～

レポートには、現在の宇宙開発・探査に関心がある文系の学生たちの関心の傾向が如実に表れている。高度経済成長期以降、長らく宇宙は夢とロマンをかき立てる対象であった。むしろ宇宙は科学が対象とする「合理的な」領域というより、科学を越えた想像力を広げてくれる存在であり、また人間存在を限定する空間と時間の次元をも越えた存在であった。さまざまな宇宙開発・探査上の発見や出来事によって、好奇心がかき立てられたにせよ、多くの場合、それを理解するに必要な科学的知識を得る事よりも、「宇宙」がかき立てるイメージに重点が置かれていた。何度か起きた「宇宙ブーム」が、宇宙を舞台にした近未来、あるいは架空の世界を対象とした特定のコミックやアニメーションのブームとリンクしていたことにそれが現れている。そしてイメージとしての「宇宙」と「地球」というより、「地上」は切り離された存在だった。

一方、今回のレポートで取り扱われたブームは、むしろ逆の傾向を示している。「極限状態における人間の心理と行動—宇宙飛行士と南極越冬隊の比較から」、「エスペラント語の宇宙公用語としての可能性—英語が共通語となっている現状の問題から考える」あるいは、「宇宙食×イスラム教」など、現代世界における諸問題や諸現象と結びつけて宇宙を議論するテーマが多数を占めている。これはレポートに先立って行われた講義内容が、現代社会・文化と結びつける導入や問題提起の内容が影響した結果であるとも言えよう。しかし70年代、80年代に今回のような試みをしたとしても、おそらく今回のような世界のリアリティと接続するようなテーマはそれほど多くはないものと考えられる。

この理由は、現在の学生たちは現実の世界の連続性が実感できるほど、宇宙開発・探査とそれに伴う様々な技術革新が生活に対する影響、さらにはメディアを通じた臨場感をもっているのではないかという仮説も立てることができる。学生たちが宇宙に関心をもつようになった契機は、実際の宇宙飛行士の訓練過程をリアルに描いた『宇宙兄弟』というコミック、「はやぶさ」やISSに関するリアルな映像、そして日本人宇宙飛行士のメディアへの登場が挙げられる。

それだけ現在の文系の大学生にとって宇宙が「身近」になったと評価しうる一方で、この事は決してポジティブな面だけではない。それは、宇宙開発・探査や宇宙そのものを、実生活の延長上、つまり現在の社会の延長上でしか捉えることができなくなっている可能性である。つまり宇宙が特別な対象でなくなることは、つまり他のさまざまな生活の関心事と同列に並べられ、個人的な観点から優先順位がつけられるというように、ある種の「矮小化」が起きている可能性がある。これは宇宙開発・探査がもたらす文化や社会の変化の可能性を小さくするネガティブな方向に向かっていると言えるであろう。また、メディア

の影響が過大になりすぎると、それは宇宙開発・探査や「宇宙」そのものが、むしろ疑似リアリティとなり、他のイメージ商品（例えば、リラクゼーション、イメージ映像に使われるように）と同じく、消費の対象となってしまう可能性もある。

このようなポジティブ／ネガティブな面が垣間見えてきたことは、講義実施前の私たちの予想にはなかったことである。もちろん、今回のレポートは神戸大学、しかも国際文化学部、さらに宇宙に関心をもつ学生、という限られた文系学生の個別性があり、安易に一般化をすることは問題であろう。今後、こうした試みを一定期間、さらに他大学の事例を加えることで、文系学生の関心、理解、問題の所在についてより深く検討できるようになるであろうし、これはまさに人文社会学的テーマとなる。

次ページ以降、いくつかの代表的なレポートを事例として示してみたい。

なお、取りあげるレポートは研究論文としてではなく、「事例」として示すものであり、学術論文の厳密な形式が必ずしも守られていない事をあらかじめお断りしたい。